

あの夏、祖父と湖に泳ぎにきたあの夏。

あの夏に、なにかもが始まった。

あの夏、君が会いに来てくれたから。だから、一步を踏み出すことができた。

あの夏、私は川に飛び込んだんだ。君が手を差し伸べてくれたから。

祖父のラミーは、ココにとっては父のようなものだった。浅黒い肌の色をしたラミーは、その少なくなった灰色の髪を少し揺らしながら言った。

「今日は、泳ぎに行ってみるか。」

ここらは海のない土地だから、ココはまだ一度も泳いだことがない。その朝、泳ぎに行くかと誘われたココは二つ返事で頷いた。ラミーは熟れた野菜のようにしわくちやになったその優しい顔に、さらにシワを増やすようにして笑った。そのヘンテコの顔を見ると、ココも思わず笑顔になった。

朝食の支度をしにキッチンへと向かうラミーの後ろ姿を見ながら、ココは心臓がハネて遊びはじめたのを感じた。初めてのことをする時は、いつもこうして心臓がハネるんだ。ラミーには色々なところに連れていってもらった。昼の日が降り注ぐヨーラの森の奥で、何時間も苔の蒸した岩の上に座って絵を描いたり、野生の馬の群れを見るためにヨーラの森を超えた先のライ平原までピクニックをしたりした。ヨーラの森を抜けてライ平原へ出た時、野をものすごい速さでかける野生の馬の群れを見て、その時もココの心臓はびよんぴよんと跳び跳ねた。くすぐったくなるような気持ちだけけど、ココは嫌いじゃなかった。

ココはユタという国に住んでいる。発達した国ではないが、自然が、生き物がとても美しい国だ。中心街から馬車で2時間ほど離れた名もない場所に、ココとラミーは暮らしていた。星が美しいこの場所で、二人は毎晩のように星を眺めた。街から離れたところで暮らしていると、夜は星空のもと、涼んだ空気の中に響き渡る生き物たちの歌声をいつだって聞く事ができる。家の裏の木々木々にハンモックを二つぶら下げて、二人はそれぞれに寝っ転がって、静かに星空を眺める。ラミーはいつも、しばらくすると読書を始めて、気づいたらそのまま眠ってしまうこともある。ラミーは無口ではないが、物静かな人だ。静けさを好むのは、静寂に平和を見出しているからだろう。毎日のように眺めても全く飽きのこない美しい星空と同じように、ラミーも変わることのない安心感を持っているようだった。

「今日は長旅だぞ。いいな？」ラミーはお昼のご飯と着替えを詰めた袋を背負ってから、手を伸ばした。ココは笑顔で頷いて、その手を取った。

目的地はライ平原を左手に向かったところにある湖だった。ヨーラの森をそろそろ抜け出そうという時ココはまだ軽快に歩を進めていたが、ラミーはすでに息を荒げていた。ラミーはもうすぐ70に差し掛かるうとしていたし、何しろ、二人分の昼食と、二人分の水泳着や体を拭くためのタオルなどをすべて一人で担ぎ込んでいたからだ。日の光が木々の間から降り注ぎ、地面に光の万華鏡を作りだしているかのようだった。カラっとした気候と、時おりふく風とともに運ばれてくる木々の生きた匂いが心地よかった。ラミーとココは半世紀ほど年の違う二人だったが、どこか家族よりも仲がいい自信があった。ココはラミーに5歳の時に拾われた。そこから、4年の歳月が経った。ラミーはココの出生について知らないという。ただ、彼が旅をしていた時に孤児院の前で少女が立っているところを見たまま通りかかったから、彼はココを連れてまた旅を始めたのだと。ラミーは世界中の色々な場所を知っているそう。人生が半分を過ぎたと思った時から、ずっと旅をしてきたのだという。静かなラミーだが、旅の話になれば眉をおでこが半分になるまであげて、楽しそうに話した。なんでも彼はこの星の反対側まで行ったのだという。

「難しいことじゃないさ、時間をかければ誰だって行きたいところへ歩いて行けるさ。」
ココがその旅路に感心したそぶりを見せるたびに、彼は口癖のように言った。

「世界は美しいよ。僕が見てきた世界に、美しくない場所など一つもなかったんだ。あれはすごかったぞ。あれは、そう、夜の星空に白の鳥が群れを成して飛んでいたんだ。そう、ユークレイでは、その景色は当たり前らしい。だが、ユークレイの人々は毎日それを眺めに夜中に山を下るんだよ。なぜ下るかわかるか？山の頂上では空と近すぎてしまっって、全体像が見えないんだよ。そう、鳥たちが夜空に描く形がしっかりと見えないんだ。近すぎてしまっってね。歌でも歌っているのかな。群れはね、独特のリズムでどんどんと形を変えていくんだ。でもね、さいごには、一匹一匹、全く違う方向へ飛んで行ってしまっんだ。」
ラミーはユークレイの鳥の話が好きだった。だからココも、いつか見てみたいと強く思うようになった。

「目的がなければ退屈なことだって、あるだろうよ。でも、旅に目的はいらないさ。目的なんぞ、歩いてさえいれば向こうからやってくるものだ。」

「そうやって、いつもラミーはどうか話に区切りをつけているようだった。彼は旅のことを語るのが本当に好きだった。」

「ほれ。久しぶりのライ平原だ。」

目の前に急に開けたその真っ平らな緑に、ココはまた心臓がびよんと跳ねるのを感じて、近くの小岩に飛び乗ってクスクス笑った。あの馬が群れを成してここを走るの、春の時期だけだから、今は見ることはできないけれど、ココはあの時と同じように心臓のリズムに合わせてダンスをしていた。あの馬たちもラミーと同じ。旅が好きなのだ。あの馬たち

がここに来るのは子供を産むため。それ以外の時期は、一年間群れで旅をし続けるのだった、ラミーが言っていた。

強い日差しを避けられる木陰に布を敷いて、ラミーはお弁当を広げ始めた。ラミーが包みの中に入れてあった薄茶色の木箱を開けると、フーアの実をすり潰して煮込んだとつても甘い蜜の匂いが風に乗ってやってきた。ココはその香りを感じて、初めて自分の空腹に気づいた。ライ平原までの長い道の中で、ご飯のことも忘れかけていたなんて、ラミーといると本当に楽しくて、不思議だなあと感じた。野の上で踊るダンスは気持ちよかったが、大好物のフーアの蜜はココをすぐさまラミーのもとへ呼び戻した。

ライ平原に出るまでに、ココには重大な任務が課されていた。それは、ヨーラの森になるシヨイという小さな、しかしよく葉をつける太った木からその紅色の葉っぱをいただくことだった。シヨイは森の至るところに立っている木だから探す手間はかからなかったが、葉っぱを取る時にコツがいる。木の下の方でもなく、上の方でもなく、中ほどに生えている実が落ちた葉っぱだけを取るのだ。まだ実がついている葉っぱは、実に栄養を送りどけるといふ使命があるから、実がある葉っぱはとってはいけない。とラミーが教えてくれた。ココがラミーに集めてきたシヨイの葉を渡すと、ラミーはそれを受け取ってじっくり観察し始めた。ココは緊張した面持ちでその様子を見つめたが、しばらくするとラミーはまた、ココの顔を見て熟れた野菜にシワを増やした。

シヨイにフーアを煮込んだ甘い蜜を塗りつけて、ココとラミーはそれを家から持ってきた餅にのせて御し頂いた。苦みのあるシヨイとフーアの甘さを包みこむ餅。特別な日にはラミーはココのお気に入りのご飯をいつも用意してくれる。ラミーは他にも、鳥の肉を甘くて濃いタレで煮込んだものや、地から生える噛みごたえのある野菜を炒めたものなど、豪華なお弁当を作ってくれていた。

お腹を満たした心人は、今度はライ平原を西側へ歩き始めた。ここまで来てしまえば後は少しばかり歩けば目的の湖がある。あとどれくらいかな、とココが思っていると、ラミーはふと思いついたように、つらつらと語りだした。

「こういう平原には、動物が隠れる場所が少ないんだ。草の背は低いし、大きな岩も少ないだろう。見晴らしはともいいが、森から出てきてしまうと動物にとっては危険な場所にもなるんだよ。このライ平原には大きな肉食動物はやってこないから、だからもちろん私たちもこうやって歩けるわけだけどね。昔一度、襲われたことがあってね。」

そう言うってラミーは鼻からふつと息を吐きだして笑って見せた。ココは目を見開いて祖父を見つめた。自分が襲われた話を笑いながらしているその横顔に、太い切り傷があることを思い出したのだ。こめかみから耳の下まで、その線はしわくちや顔のラミーが笑っても周りのシワに埋もれないくらい太い線だった。話の続きを聞こうとラミーを見つめている

と、

「前を見ないと危ないよ。」

と言つてラミーはココの肩を掴んで、目の前に迫っていた太い木を指差した。驚いたココは思わず後ずさりした。

「驚いたろう。ふふ」とラミーはまたシワの中に埋もれた薄い眉を曲げて見せた。そのちよつといじわるな笑みをココはラミーに似合わないと思つた。

だが、いきなり太い木の幹が目の前に出現したことへの驚きは、すぐ次の驚きに取つて代わられた。その木の幹の目の前には生い茂った木々でふさがれて、葉の隙間からはこちらへ向けて眩しいほどの光が溢れていた。ライ平原の西側にこんなに木々の生い茂る場所があつたことよりも、生い茂った葉のアーチが作る光差す道のその向こうに見える、強い光にココは惹かれた。飛び跳ねる心臓を頭の裏側で意識しながら、ココはその葉のアーチの下を、一歩ずつくぐつていった。

アーチの先には、日の光を受けて輝く壮大な水溜りがあつた。周りを深々しい緑が囲み、水は深く緑を写していたが、水面は眩しいほどに煌めいており、美しい。こんなに大きな湖を全く想像していなかつたココは、ぽっかり口を開けたまま突つ立てしまった。その顔を見てラミーは隣で大笑いした。そしてお弁当を食べて少し軽くなった荷物をあさりながら、伸びをした。

「さーて、久しぶりに泳いでみるかなあ。」

ココにとつて水泳は初めての経験だつた。岸から手を離す怖さや、耳に水が入ってくる感覚、その全てが新鮮だつた。足がふわふわと踏場のない場所を蹴り続け、体は強張つてしまった。水は澄んでいて美しかった。しかしその水もだがラミーと暮らしてきたココの自然への対応力は大したものだつた。少しずつだが、ものの見事に彼女は泳ぎをこなして見せた。ラミーは教えようとはせずにつつとココが水と向き合っている様子を見つめていた。ココは口がきけないから助けを呼ぶことができない。ラミーはずつと目を離さずにその姿を見守り続けた。ココはどうやったか体を水に浮かせることができるのか。どうしたら前に進めるのか。ココはもがきながらその方法を見つけようとしていた。その姿を見ながら、ラミーはココの成長に喜びを感じていた。

彼女に出会つたのは4年前。ラミーは目的のない旅をしていた。居城に囲まれた古き貴族の住まう国を過ぎ、雨のふらない砂漠を横断し、気づけばまたたく星を一生見ることのない白夜の世界へとたどり着いていた。強い風が終始吹き付けるその地で、砂埃がマントにザラザラと音を立てながらぶつかっている。砂埃に混じつて木の実の香りが漂うその街では、人々はみなかさねた白色のマントを羽織り、口にも布を当てている。砂埃が顔にかからないようにするための一つの文化でもあるが、この国の人々は顔を隠したがる気質が

あるために、彼らはそのように着飾っているようだった。ラミーが旅を始めたのは、純粋な気持ちであった。まさかその旅の先で、偶然にも出会った少女と余生を共にすることになるなど全く考えていなかったラミーは、ただただ歩く先に現れる街を渡り歩いていった。街はどこも全く似ても似つかない。人々も違う。しかし、ラミーにとってはどの人間も同じだった。いや、どの人間もラミーにとっては違って見えたと言うのが正しいのだろうか。なぜならラミーは種にこだわらない。この街にはこんな人たちがいた。と一括りに何かを語ることをラミーはあまり好かなかった。どれほど同じ格好をしていようが、どれほど奇抜な空気を持つ人たちでさえ、ラミーは一括りにはしたくなかった。ラミーが見るのはいつも一人の人間でしかなかった。目の前に立ってその人の顔を見る。それがラミーには大切だったということだ。どの街でも彼は少なくとも10人と話をすると決めていた。それが、彼の旅路における唯一の決まりごとであった。通りすがりの力の漲るような若者に、横に座っていた腰曲がりの老人に、忙しい日々の一時の休息を楽しんでいる母親らしき細長い女性に、彼はいつも声をかけていた。その日も砂埃がザラザラと音を立て、行き交う人々とぶつかり合っては強い日差しの中に遠く消えていった。鳴り止むことないその砂の調べを感じながら、ラミーは白夜の街の夜を体感していた。この街では、日が落ちる代わりに風が夜の始まりを告げた。風は次第に弱くなり、空気はしばらくすると肌寒さを運ぶ冷気へと姿を変えた。風が止むと砂埃も寝静まったように、静寂を抱いた。砂埃の攻撃が終わったと、ラミーが被っていた分厚い皮で作られたマントをとった時、右手にレンガ造りの屋根の低い家を見つけた。その手前に子供が一人座っていた。